

コロナ下におけるギャップイヤー（GY）に取り組む学生たち（1）

：その可能性や課題を考える

同志社女子大学教授

秦由美子

1) GYの目的

GYは本来、自分自身に対する反省あるいは振り返りのための時間であり、自分の将来や人生と真剣に向き合うところから始まる。学生、会社員、主婦といった社会のカテゴリーから離れて、自分や社会を一步退いた立場から眺めるための時間である。生徒や学生にとってみれば、GYの期間は、父母の保護から抜け出て日常から離れ、自分の人生を切り拓く期間であり、独力で自己自身と真剣に向き合いながら、将来への省察と展望を、多様な人々との交わりや経験の中でじっくりと醸成していく時間である。それは、昨今大学教育改革に関わって語られているところの、学士力、社会人基礎力、就業力といったカタログ化された諸能力の基盤となる、より根源的な人間としての力を見据えたものであり、若者の成長にとって真に必要なものを探し求めた結果生み出された、イギリスの歴史と文化が巧まずして織り成してきた「社会的制度」に他ならない。

2) ギャップイヤーを取り入れる大学が出始めているが、この動きをどう考えるか

春入学であれ秋入学であれ、入学の時期如何にかかわらず、大学入学が決まった時期から入学までの間の時間を、GYとしていかに個人が自らのために有意義な時間とするかが重要で、その期間は若者が自らの人生を考えるための縛りの無い自由な時間とすべきであろう。

その期間は若者は何をしても可とする。ただし実施する活動は、周囲から道筋を立ててもらい、資金援助もあるようなものではなく、自らの自立を支援する独自の活動でなければならない。

個人の成長という点から考えると、GYを個人の成長と関連付けた形で実施する限りにおいて、地方の大学であれ、都市圏の大学であれ、個人にとって有益なものとなろう。地方大学であっても、地域と結びついた活動があるであろうし、海外での活動も考えられる。それら学生の活動を、個人の成長として支援できる大学であるかどうかで、その大学がGYをメリットとできるかどうかが決まる。

GYは個人の成長を望み、それをボランティアな団体が支援し、大学や産業社会もその趣旨をよく理解して受け容れるというように、若者の意識や人々の善意、そして社会の理解によって、相互信頼に基づいて形成されてきたものであり、その精神に我々が学ぶことは重要である。個人の自発的な意志と決断に基づく人生のコース選択を大学や社会が受け入れているという文脈で理解されるべきものである。

日本の大学でのギャップイヤーはターム制への移行により、日本人学生と海外留学生と

の交換留学を円滑にすることや、ギャップ期間を進学者の体験学習に当てようと考えているようだ。体験学習とは、恐らく語学研修や企業でのインターンシップといった実益の伴う学習であろうが、イギリスでは GY の活動内容は地雷撤去作業場での支援活動からアフリカでのボランティア活動、英語指導やオーストラリアでのサーフィン研修まで多種多様である。また、目に見える成果ではなく、将来的な個の成長に繋がるものの選択が好まれる。

例えば GY 支援団体の GY コム (Gapyear.com) のグリフィス氏は、GY の過ごし方として若者に「中国に行き孤児たちに英語を教えることと、タイのビーチでのんびり過ごすこととどちらが良いかを尋ねると、大半は前者を選ぶであろうが、GY の目指す点は・・・」氏によれば、「全て自力でタイのビーチに辿り着いたのであれば、それは両親に金を出してもらって中国で決められた仕事をするよりも素晴らしいこと」なのである。GY は何をするかではなく、そこから自己成長に繋がる何を得たかが問われるのである。

3) ギャップイヤーの目的とは

GY の起源は、支配者が国際的教養を補うための旅行だといわれているが、近年のイギリスでの GY の定義は、人生のどの時期においても、自ら取り組む長期にわたる活動とされている。重要な点は、その期間が自身の正規の経歴の中で取る期間（教育や職場を離れ、様々な活動に時間を費やし、また、元の教育や職場に戻るということ）であるという点であり、実施する活動は自己実現の一つの糧となるならばどのような形（開発途上国での支援活動、ボランティア活動、職業体験、資金（学費等）のアルバイト、語学教師、海外旅行等々）であってもよいという点である。また、GY の資金は元来個人で稼ぐものと考えられている。アルバイト、銀行ローン、貯金や GY で資金を稼ぎながら GY を続けるといった具合である。

4) ギャップイヤーの課題

社会からの支えという点で付言すれば、もし GY が日本で本格的に動き始めるとすれば、様々な社会的な体験プログラムをサービスとして提供しようとする動きが出てくるであろう。従来からそれなりの問題意識をもって取り組んできた NPO 法人や企業だけではなく、格好の商機とばかりに、「ためにする」ボランティア活動や語学研修旅行が企画されて、その広告チラシが受験生のもとに大量に郵送されるといった事態を招来するかもしれない。また、入学前教育プログラムも同様に注目を集めるであろうが、これに至っては GY の考え方とは遙かにかけ離れたものである。

5) 今の日本の社会に必要なこと

我々が GY から学ぶべき点は、ライフコースに関して年限としての縛りが強固で、遠回りを余り許容しない日本の社会の在り方であろう。落後することへの恐怖から、自らの興味・関心に基づくチャレンジを若者が避けているとしたら、それはこの国の未来にとっても影を落とすことになる。生涯学習も視野に入れた上で、大学や社会に出るまでの間で、

遠回りも含めた若者の多様な選択を後押しするような、政策的・制度的な配慮こそが求められていると思われる。

個人の成長を望み、それをボランティアな団体が支援し、大学や産業社会もその趣旨をよく理解して受け容れるというように、若者の意識や人々の善意、そして社会の理解によって、相互信頼に基づいて形成されてきたイギリスのギャップイヤー、その精神を我々が学ぶことが重要である。

社会での多様な選択を可能にする制度の一つとして機能することが重要で、そうすることにより、遠回りを余り許容しない日本の社会の在り方に一つの風穴をあけるものとなる。その中で、セカンド・チャンスやサード・チャンスが許される社会に社会全体も民度も成長していくのである。

6) 就職において経済界の理解が欠かせない側面

国内外でギャップ制度を取り入れる企業も幾つか出てきているように、ギャップ期間中に成長する若者が増えれば、社会や企業も無視するわけにはいかず、自ずと社会全体のシステムは変わるはずと考えている。そのためにも、短期的な功利的活動を若者に勧めるのではなく、若者は、個人の成長に繋がる、人間性に関わる場所の意味ある活動をすることが重要である。